教職支援室便り（１月号）

令和７年　１月　１０日　（金）
文責：教職支援室　曽我文敏
☎０９８５－２０－４８０８

教職課程履修者の皆さんへ　卒業生からのエール

１月に入り、新しい年がスタートしました。卒業される学生の皆さんは、いよいよ３月には卒業を迎えます。また、教職に就く皆さんにとっては、赴任する学校を知らせる通知を待つばかりです。今の心境は、教職への希望と不安が錯綜して複雑でしょう。確かに、教員の業務には厳しいものがあります。学習指導や生徒指導、学校行事や地域での活動など、多くの業務の中で、大変な仕事だと感じることがあります。しかし、教職をやりがいのある仕事だと、実感することも多くあります。宮崎公立大学の卒業生としての誇りをもち、これからの教職人生を、素晴らしいものにしてください。

そこで１月号、２月号、３月号では、教職に就く皆さん、また今後教職をめざす皆さんへの、卒業生からのエールを紹介します。今回は、神奈川県立綾瀬西高等学校の朝倉智恵さんに寄稿していただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。心から感謝いたします。

令和４年３月卒業
神奈川県立綾瀬西高等学校　朝倉智恵さん

私は宮崎公立大学を卒業して、現在神奈川県の高校で教員をしています。２年生の担任をしており、忙しくも充実した日々を送っています。

教職課程は授業が多く、教育実習もあったりと大変だと思いますが、教員を目指す仲間や、曽我先生をはじめとする宮崎公立大学の先生方が力になってくださいます。「教員になりたい！」という強い気持ちがあれば、応援してくれる環境が整っていると思いますで、最後まで頑張ってほしいです。特に私は曽我先生にお世話になり、教職特別講座を受けていました。面接指導や模擬授業対策も、とても丁寧にご指導をいただきました。そのおかげがあって、私は合格することができたと思っています。

今振り返ると、教員採用試験に向けて教職教養や英語の勉強に励んだこと、面接や模擬授業対策を必死になって取り組んだ日々は、自分の人生の中でも本当に貴重な時間で、その時間があったからこそ、どんなに仕事で辛い日があっても、乗り越えることができています。

大学４年間を後悔のないように送ってください。応援しています…！

教員採用選考試験における英語力の重要性

現在、教員採用選考試験においては、小学校教員の採用者数が全国的に多い傾向がある中で九州各県の中学校英語、高等学校英語の合格者数については、一律に増加傾向とは言えない状況があります。受験者数の減少はあるものの、大学生の皆さんにとっては、学校現場で勤務している、臨時的任用講師等の先生方と競合する試験であることから、狭き門であると考えます。

本学では、教員採用選考試験に向けて「教職特別講座」を行っていますが、学生の皆さんの自助努力も不可欠であり、英語力を磨くこと、英語力を向上させることは、合格への必須要件です。ＴＯＥＩＣ７３０点以上、英語検定試験準１級以上等の資格取得に向けて、積極的に英語力向上に取り組んでほしいと思います。

＜教員採用選考試験英語科合格者数（九州各県）＞

採用年度		令和７年度	令和６年度	令和５年度	令和４年度	令和３年度	令和２年度
宮崎	中	８	７	１１	１１	１０	１５
	高	３	２	６	７	２	６
沖縄	中	２３	２６	１５	１２	１４	１５
	高	８	８	６	４	７	７
鹿児島	中	２６	２４	２５	２０	２０	２０
	高	４	５	４	３	３	３
大分	中	１５	１０	１８	２０	２０	２２
	高	４	４	４	３	１０	６
熊本	中	１４	１０	１５	１３	１１	１３
	高	１４	１０	７	３	２	２
長崎	中	１６	１５	１６	１１	１４	１４
	高	１２	１９	１０	９	８	７
佐賀	中	１６	１４	１３	２０	１７	１４
	高	６	３	３	５	５	４
福岡	中	６０	５８	６６	５２	４９	３６
	高	３０	２１	１８	１６	１８	２７

教員としての資質・能力を養う教職教養演習の重要性

教員採用選考試験に向けては、教職教養に関する知識を習得、活用して、教育問題に対する自己の考えを、十分に表現できる力を身に付けなければなりません。教職教養の演習で培われる力は、一次試験「筆記試験」だけではなく、二次試験「面接、模擬授業、集団討論、グループワーク、場面指導、小論」などにも大きく影響します。

さらには、教職教養の演習を積み重ねることにより教職への理解が深まり、学び続ける姿勢、使命感、教育的愛情などの、教員としての資質・能力の向上が図られます。このことは、これまでの教職特別講座を通して、多くの学生の皆さんの「受講後の感想」に見られました。

現在自治体によっては一部、教職教養試験を廃止する動きもあるようですが、人材育成の見地から、教員採用選考試験において実施すべき試験であると考えます。

受動的ではなく能動的な取組の重要性

担当者としては、教職特別講座においても、学生の皆さんのあらゆるニーズに応えていきます。そのために、講座の時間を確保する中で、意図的・計画的に、多面的・多角的に講座内容を工夫したり、受講者のニーズに十分に応える資料等を作成したりしています。しかし、学生の皆さんの自助努力は不可欠です。自己課題を明確にして、学びの工夫をしながら取り組むなど、受動的ではなく、能動的な取組が求められます。１年の間には、壁にぶつかることもありますが、粘り強く取り組んでいってほしいと思います。私も学生の皆さんと、充実した１年を過ごしたいです。

＜現時点での受講しての感想＞

ここまで講座を受けてきて、周りの人の話を聞いて「いい意見だな」と心を打たれることがだんだんと多くなってきているように感じます。それは、皆が講座を通して、これから大きく長期的に自分たちに影響するものを、得ていることの表れだと思います。求められる資質や法律を、文字通りの意味だけを頭に入れるのではなく、「なぜ」そう言われるのかというところまで考えることで、教職に必要な「心」を少しずつ自分の中に育てているように感じます。教員に求められることの多さを日に日に感じていますが、それが不安を招くのではなく、教師への道のりを一歩ずつ進めている実感をくれ、逆に、より具体的な未来をイメージして、ワクワクする気持ちの方が何倍も大きくなりました。

しかし、そんな中でも、まだうまく言語化することができないのが「どうして教師になりたいのか」という問いへの答えです。「憧れる人がいるから」や「自分は〇〇が得意だから」のような自分軸のものではなく、これから出会う生徒たちを真ん中に据えた、ぶれない答えを自分の中に持ちたいです。しかし、それは簡単なことではなく、まだまだ真剣に向き合い、実際の現場の情報に耳を傾け、未来の自分や生徒の姿を想像して考える必要があると思います。教職の「心」を育て始めたからこそ言える、教師としての自分の根幹になるような目標を形にしていきたいです。

特別講座を受講する中で、問題に取り組む姿勢が変化してきたように思います。初めの方は、見たことのない問題を解くことが精一杯で、その背景にある問題や、自分がその問題から何を感じたのかというところまで考えきれていませんでした。しかし、他の受講生の意見を聞くことや、講座の中での話合いに参加する中で、常に問題意識をもって演習に取り組み、解いて終わりではなく、その先まで考えるというような姿勢が身に付いたように思います。さらに、講座の中で隔週で行われている討論は、とても私の中では有意義な時間です。自分が考えていた観点とは違うものを知れるだけではなく、自分の観点にはこういう反論が来る可能性もあるのかという考察もできる、とても貴重な機会です。自分１人では理解が難しいことも、他の人と考えを共有、交流させることでわかるようになるということを講座を通してとても実感しています。これから、さらに採用試験への勉強が本格化してくると思いますが、他の受講生から刺激をもらいながら、私も良い影響を与えらえるよう頑張っていきたいと思います。引き続きよろしくお願いします。

私は、この教職特別講座を現時点まで受けて様々な刺激を受けました。日頃の過去問演習では、今まで知らなかった様々な法令を過去問で解いていく中で、知ることができることはもちろん、それに対する他の人の意見を聞くことができることが、とても貴重に感じます。自分がもっていなかった視点を、他の人の何気ない質問や感想を聞くことで得ることができるし、新たな発見につながっているように思います。さらに今まで二回あった討論の回では、さらに自分自身の考えを深めることができます。やはり話合い活動を通して、自分のいった意見に賛同してくれたり、質問をしてくれたりすることで自分の意見をより客観的に見ることができると感じました。今後の過去問演習でも討論でも、曽我先生や他の人の意見をしっかり聞いて、様々な視点から教育をみていきたいと改めて感じています。これからもよろしくお願いいたします。

道徳の教科化に思う！（シリーズ９２）

平成２９年の６月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。今回は１０月号からの続編で、「道徳科における不易的要素を考える～読み物教材に真正面から向き合う道徳科の時間とは～」のテーマをもとに、その４として「教師が児童生徒と共に教材にある人間としての生き方を学ぶ授業」について述べます。

＜教師が児童生徒と共に教材にある人間としての生き方を学ぶ授業＞

道徳授業における教師の指導姿勢等について、「小学校・中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」から抜粋すると、次のように述べられている。

・第３章第１節１(1)＜小学校・中学校共通＞

学習指導要領第３章の「第２内容」は、教師と児童（生徒）が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。

・第４章第２節１（２）＜小学校＞

道徳科の指導は、児童が道徳的価値に関わる感じ方や考え方を交流し合うことで自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習を行う。このような学習を効果的に行えるようにするためには、学級内での信頼関係の構築が基盤となる。教師と児童の信頼関係や児童相互の人間関係を育て、一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる雰囲気を日常の学級経営の中でつくるようにすることが大切である。

・第４章第２節１（２）＜中学校＞

道徳科の指導は、よりよい生き方について生徒が互いに語り合うなど学級での温かな心の交流があって効果を発揮する。

教師と生徒との信頼関係や生徒相互の温かい人間関係は、生徒一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる雰囲気を、日常の学級経営の中で創り出すことによって豊かに育まれていく。また、道徳科における教師と生徒及び生徒同士の心の交流は、学級の人間関係をより一層確かなものにしていく。

道徳科が学級経営と深く関わっていることを理解し、学級における信頼関係に基づく温かい人間関係を築き上げ、心の交流を深めることが大切である。

・第４章第３節３(1)＜小学校・中学校共通＞

(略)教師自らが児童（生徒）と共に自らの道徳性を養い、よりよく生きようという姿勢を大切にし、日々の授業の中で愛情をもった児童（生徒）への指導をすることが重要となる。

・第４章第４節２(２)ウ＜小学校・中学校共通＞

道徳科の学習は、「人生いかに生きるべきか」という生き方の問いを考えると言い換えることができ、道徳科の指導においては、児童（生徒）のよりよく生きようとする願いに応えるために、児童（生徒）と教師が共に考え、共に探求していくことが前提となる。

・第５章第３節４＜小学校・中学校共通＞

（略）道徳科の授業で児童（生徒）が伸びやかに自分の感じ方や考え方を述べたり他の児童（生徒）の感じ方や考え方を聞いたり、様々な表現ができたりするのは、日々の学級経営と密接に関わっている。

　このように、道徳科の授業においては、教師は「一人の学習者」としての姿勢をもつことが重要である。それは、教師自身が教材分析の段階から、登場人物の生き方に照らし自己の生き方を考えるなど、教材に真正面から向き合い、生き方を学ぶ姿勢である。これは道徳授業を支える、教師の大切な資質・能力の一つである。
　「読み物教材に真正面から向き合う」授業とは、「教師も一人の学習者として、自己の生き方を学ぶ」授業である。子どもたちと共に学ぶ教師でなければできない、つぶやきや表情、発問がある。